

【目的】 都市生活での芸能観賞空間は、劇場等の非日常空間と住宅内のTVを中心とする密室化された日常空間とに分解されている。これに対して伝統的農村生活では、コミュニティの共有空間としての芸能施設が存在する。昨今は、こうした祭りやその空間のもつ重要性が見直されつつある。しかし、これまでの地域社会の芸能空間の多くは芸能史の補足としてのみ研究されてきた。これらを前提に、農山村の伝統的コミュニティ施設が生活と人と芸能を通してどのように機能しているかを考察する。本編では、小鹿野町の芸能施設としての農村舞台と神楽殿の建築様式について考察する。

【方法】 秩父地方は、民俗的な伝統的芸能施設が多数現存している。本地域の小鹿野町の農村舞台及び神楽殿を実測し、行事と空間との関連性を聞き取りで調査した。

【結果】 農村舞台 - 5例、神楽殿 - 7例、両者の折衷型 - 3例現存している。

- ・農村舞台は、木造平屋で舞台装置として二重舞台（固定式4例・可動式1例）を有し、花道は仮設が多い。平面的には一定の形式はない。屋根は、材料・形式とも多様で舞台は桁行方向の利用が多かった。用途は、歌舞伎・集会・カラオケ等と多様化している。
- ・神楽殿は、木造平屋で舞台の後方に神座をもち、間口・奥行・床高・内法寸法に相関関係がみられ、様式化されていることが分かる。屋根は、入母屋・金属葺で、舞台は妻側に設け、用途は神楽神事のみ限定されていたが、近年歌舞伎にも使った例もある。
- ・折衷型舞台は、神楽殿の様式を残しながら前面に床高の低い舞台を仮設し、それが常設化したのがこれで、小鹿野町の農村舞台の発生に近づく過渡期様式と言えよう。